



創立七週年記念式舉行

勤續十九氏に榮ある表彰

昭和十年十一月社団法人同盟通信の設立認可を得てより七周年の佳き日を迎へた十一月七日午前九時より電通ビル八階大廣間において盛大なる記念式を舉行了した。島山、上田、堀三常務以下、各局長、部長、參事等社員多數出席のもとに先づ國民儀禮を行ひ、次いで島山常務は古野社長に代り別項のごとき挨拶を述べた。次いで下記の十九氏に對し島山常務より勤續者表彰状を授與、これに對し被表彰者を代表し人事部次長伊藤勝司氏の答辭あり、同十時閉式した

社長挨拶

(島山常務代行)

本日は同盟創立第七回記念日であります。顧みますればわが社団法人同盟通信社は今から恰度七年前の昭和十年十一月七日に設立の認可を受けまして今日の基礎を築いたのであります。そこでわれわれ四千の同盟人は毎年本日をとし年と共に成長して参ります足跡をふりかへつて、われわれの使命のますます重大なるに思ひを致すと共に更に將來の躍進への覺悟を新にするため本日を同盟創立記念日を定めまして、今年もここに厳かに記念式典を舉行することとなつたわけでありませぬ。

なほ本日はこの意義深き記念日に當り多年社運の發展に努力して來られた永年勤續功勞者十九名の表彰式をも併せて行ひたいと思ふのであります。

古野社長は昨年の今日、同盟成立の經過を述べ、「前社長岩永裕吉氏が心血を注がれた同盟の組織は不滅の金字塔である。ロイテは六年遅れてわが社の眞似をしAPもまた同盟をまねて無線電信放送を開始した。われらの同盟は近代的世界通信社の魁だと斷言して決して間違ひでない。岩永前社長はわれわれ四千の同志のために世界最善の組織を遺された」とその理由を證明して岩永前社長に感謝の意を表されたのであります。

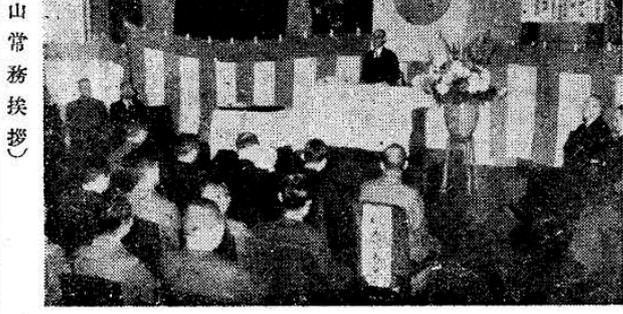
私は大東亞戰によつてますます同盟の眞價が發揮された實例を目のあたりに見、また先頃交換船で歸つて來られた人達から海外の實情を聞きまして同盟は世界一だと申上げたことと正しかつたといふ確信を固めました。前社長岩永氏を授け

號 二 十 六 第
月一十年七十和昭
行發日十・回一月毎
錢五部一價定
錢十六(共稅)分年
一才 田杉 編輯行發
國公谷比日區町市東京東
社信通盟同 所行發

てこの世界一の同盟を作られた先輩諸君に對し四千の同志を代表して深く謝意を表するものであります。

昨年の創立記念日の一ヶ月後に起りました大東亞戰爭は開戦以來の赫々たる武力戦の後を追うて思戦戦において勝ち抜いてゐるのであります。

推ふに同盟通信社が國家代表通信社として單一強力な組織の下に創立されて間もなく勃發致しました西安事件、乾谷子島事件などの例にみても、國內に對立的通信社のあつた時代に比し絶大な成功を収めたこと、更に支那事變によりまして遺憾なくその眞價と偉力を發揮致しましたことはわが朝野



(島山常務挨拶)

をあげて認めてゐるところでありまして、これは要するにわれわれ同盟四千の同志が固き信念の下に學社一致協力、火の玉となつて戦つてまゐりました成果にほかならぬのであります。

米、英をはじめ敵性國家にあつて情報の蒐集に當つてをりましたわれらの同志は大東亞戰爭勃發と同時に米、英、インド、濠洲において、いづれも抑留されたのであります。幸にも交換船によつて先頭全員無事歸還されたことは御同慶に堪へません。しかしこの同志諸君によつてもたらされた米、英、インド、濠洲、南米などの新聞、ラジオ等の實情報告は、わが思想戦の勝利、同盟の偉力發揮を如實に物語るものであります。

米國は始め國內民心および第三國におよぼす影響を恐れて緒戦の損害はその一部を發表してごまかし次に起つた敗戦についても之を押しかくし、戦況を有利な如く發表してゐたのであります。わが同盟が正確なる當局發表の赫々たる大戦果を四六時中電波に乗せて世界にバラ撒くので、これがだんだん米國はじめ各國民衆の間に浸透し米國の有力諸新聞もまた「政府は損害を全部發表してゐない」と公然と不満を洩らし、南米でも米國の發表に不信を唱へて同盟の放送を新聞やラジオに採用するにいたりましたので米國自身も相當量の同盟放送を新聞やラジオに採用せざるを得なくなり、殊に英國がシンガポールを失つてからは東亞ニュースの悉くを同盟放送に頼つてゐるといふ實情であります。

また英國も始めは出来るだけ敗戦を内輪に發表してをりましたが遂にわが軍がシンガポールを占領した頃より同盟の放送に抗し得ずパインバルが山下將軍に降参した時の一問一答や寫眞まで同盟の放

送と電送寫眞をそのまま新聞に掲載せざるを得ぬといふ有様であります。さらに最近の米、英は引續く敗戦のため國內に不満の氣運が一段と強くなつて來てゐることとでありまして、これは明かに思想戦におけるわが國の勝利を物語つてゐるのであります。

かのごとく思想戦に勝ち抜いてをりますことは、もとより皇軍の連戦連勝といふ思想戦にもつても大切な嚴たる事實があるからであります。

勤續被表彰者

- △二十五年勤續
 - 總務局 參事 岡崎幸次郎
 - 通信局 發送部長 山本 政常
 - 總務局 人事部長 伊藤 勝司
 - 北支總局 總務部長 鈴木幸次郎
 - 臺中支局 長 小野 正雄
- △二十年勤續
 - 總務局 業務部長 川島信太郎
 - 總務局 勤務社員 上村 藤吉
 - 編輯局 整理部 高村 利世
 - 校正主任 任 高村 利世
 - 岡山支局 長 松宮 覺次
 - 函館支局 長 瀨川伊和男
 - 鹿兒島支局 勤務社員 鎌田 秀雄
 - 大阪支社 同 西向 種吉
 - 名古屋支社 同 潮海秀之助
 - 那覇支局 長 青戸 修
 - 大阪支社 勤務社員 小澤 文治
 - 熊本支局 同 玉井平太郎
 - バタビヤ 支局長 市川 太郎
 - 神戸支局 勤務社員 徳永 廉
 - 岡山支局 同 横田喜久二

ありまして、この點われわれ思想戦に携はるものは陸海軍に對して如何に感謝しても感謝し切れないと思ふのであります。この大戦果をして以上の如く世界思想戦の戦果たらしめ得ました所以は世界無比の同盟の組織を作つてあつたことがあつて力があるのであります。

われわれは思想戦の中樞機關である同盟の一員として、その使命は洵に重大であります。われわれはこの同盟の機能を遺憾なく發揮し、あくまで思想戦に勝ち抜くことが折角の組織を作られた前社長その他の先輩諸氏に酬ゆる所以であり、邦家に對する當然の奉公でもあります。われわれ四千の同盟人はここに更に決意を新にして學社一致報道報國に邁進し使命貫徹のため大同結盟の實をあげられんことを切望する次第であります。最後に永年勤續者の表彰を行ひたいと存じます。今日表彰される諸君は二十年、二十五年以上勤續せられた方でありませぬ。諸君が勤務されてゐる中に社名は國際、聯合又は電通および同盟と變りまして、この永い間始終報道報國のために不斷の努力を致され、今日の大組織である同盟を築きあげてに多大の貢獻されたのであります。して他の範とするに足る方々であることは申すにおよびませぬ。ここに本社員一同參列の下に晴れの表彰式を行ひ、もつて深く謝意を表する次第であります。

謝 辭

最近我社の異常なる發展は全く岩永前社長の卓見と現古野社長並に役員各位の經營宜しきを得たる結果にして私共常に感銘致して居るところであります。私共は永年勤續致して居りますが、此の間特筆に價する功績もなく汗顔の至りでありませぬ。然るに今回勤續者表彰の恩賞に浴し定に感謝に堪へない次第であります。

今や大戦下の時局は重大であり我社の使命も亦愈々重且つ大を加へつてあります。私共一同は今後更に心機を新にし一層大同結盟し以て報道報國に挺身することを誓ひまして御禮の辭と致します。

物故職員慰靈祭執行

故岩永前社長はじめ七十九柱のわが社物故職員慰靈祭はわが社創立記念日の十一月七日午後二時より雷通ビル八階廣間において神式により、いと厳肅に執行された。岩永前社長令嬢その他遺族多数参列、日本新聞會、滿洲國通信社、日本映畫社各代表および崑山、土田、堀三常務以下本社側社員多数列席し、官幣大社日枝神社神官の奉齋をもつて左記次第により祭式を執り行つたが、参列者は齋主の祝詞、社長祭辭を謹聴しつゝ、幽明とを異にした前社長以下幾多同志の面影をしのび心より感謝の念を新にした。

△慰靈祭次第

- 修 祀
- 招 魂 警蹕管攝
- 獻 饌
- 齋主祝詞
- 古野社長祭辭（崑山常務代讀）
- 齋主玉串を奠り拜禮
- 崑山常務同上
- 遺族總代岩永氏同上
- 新聞會、日映、國通代表同上
- 上田、堀兩常務、職員總代同上
- 撤饌、送魂
- 塚本總務局長挨拶

祭 辭

本日茲に祭壇を設けて我同盟通信社物故職員慰靈祭を執行し、初代社長故岩永裕吉氏以下七十九柱の靈を祀る。

顧るに我同盟通信社は昭和十年十一月七日を以て我國唯一の國家代表通信社として創立せられ、年を閱すること滿七年、國運の興隆と共に社業益々隆昌、今や四千の同志を擁して晝夜を分たず、外に日本の正義を宣べ、内に世界の情

勢を告げ、一意報道報國に邁進しつゝあり。

而も昨年茲に祭詞を捧げてより一ヶ月にして皇國の興隆を決すべく大東亞戰爭の勃發するあり、戦局の進展に伴ひ前線の戦況報道に南方通信網の擴充に、我社の負荷する任務愈々重きを加へ、國際宣傳戰に於ける我社の使命極めて大なるを痛感す。この千載一遇の機に我社に職を有する者一同の感激措く能はざるところなり。

惟ふに我社の今日あるは先輩同志の獻身的努力に負ふ所多く、特に故岩永前社長は夙に今日の時局を洞察し我國に強大なる國家代表通信社なかるべからずと斷じ、烈々たる信念を貫くこと實に十有餘年、遂にその天職に殉ぜらる。又故岩永前社長の下にあつて共に社業に盡瘁せる同志にして物故せる諸氏の中には藤岡、柳澤、

蘭印・濠洲の收容所から還つて

東亞部 安藤利男

花房、下津、鈴木の諸君の如き今次聖戰に従軍して殉職戦死せるもの五柱の外、筆を銃に代へて應召殉國せる井上、森、松田、藤森、長坂、寺田の六柱あり。その外一身一家を忘れて社業に専念病歿せる幾多の功勞者あり。我同盟の今日あるは是等物故者の功に據る所洵に多大なるものあり。吾人は茲に恭しく感謝の誠を捧げ奉るものなり。

今や諸氏と共に相携へて報道報國の大任を遂行すべき途なしと雖も我等は誓つて諸氏の貽せる遺志を繼承して一致協力、大東亞戰爭完遂と大東亞建設必成のため更に一段の飛躍的努力を以て國に報ひむことを期す。冀くは在天の靈來りて我等が微衷を享け、我社の任務完遂に遍き庇護を垂れ賜はんことを。

本日を以て我物故の同志功勞者の靈を祀るに當り謹んで奏す。
昭和十七年十一月七日
社団法人同盟通信社
社長 古野伊之助

覺悟してゐたもののインテリなるものは蘭印の場合相當にどぎつゝものであつた。しかし命の危なかつたことも、苦しかつたことも過ぎ去つて見れば、皆有難い體驗として或は、得難い思出として我々の生命の中に生き蘇へり、自己の精進の爲めに役立つてくれる。生きて還つたこと、それ既に在外の出来事であり、かうも早く歸して貰へたことも豫想外であつた。その上私はジャワから濠洲へ

船主デュー・オブ・キャンタベリーの號は僅か八千トンの小船で、しかもボロ船と來てゐる。この小船に交換さるべき日本人八百七十餘名が乗り込んだのだから外務省關係と少數の一般邦人を除く外の大多數の人々はダブルの中にハンモックを吊つて、そこに寝起し、食事もそこでやつた。船内はキャンブの延長だといふ英當局の建前で我々は最後の日まで自炊をした。

食料や、石炭の運搬から、食器洗ひ、デッキ洗まで全部我々の手で行つたのである。

我等の食費は一日一志といふ粗悪なものであつた。その上この船には武装兵が六十名乗り込んで我等の監視に當つたばかりでなく、大砲や機關銃を積んだ立派な武装船と來てゐた。キャンタベリーの船長が

送られたので一度は行つて見たと思つてゐた濠洲の土を踏むことさへ出来て大きな儲け物であつた。捕つた模様、狂暴な敵の奴げらに酷い取扱を受けた話などは餘白もないし、しめつぽくもあるのに止めにして、私はこゝに少しばかり、その外の體驗の一節を書いて見る。

八月十七日燈火管制で眞暗なメルボルン港を出帆してローレンツ・マークエスに向つた濠洲の交換

いふ態度の相違なのであらうか。キャンタベリーの船長以下が慌て出して、俄に大砲をとり外す機關銃をかくす、小銃、拳銃を外して丸腰になり、將校達は肩章まで取り外し周章狼狽してゐた。何といふ醜態なんだらうか。交換船にまで疑心暗鬼な濠洲が計らずも交換地で見つた日本の姿に恥ぢ入つた様子が先づこれだつたのだから我々は全く胸がすつとしたのである。

我々は濠洲で赤服を着せられてゐた。キャンタベリーの波止場に近付くと鎌倉丸の同胞がこの赤服を見て先づ憤慨した。『囚人服ぢやありませんか、馬鹿野郎奴が』誰かがこちらを向いて怒鳴つてゐた。

鎌倉丸の船側には白ペンキで書いた赤十字のマークが一つある切り、武装兵どころか一挺の銃も身につけてゐない。しかも少數の乗組員が東亞から歸る數百の英人の萬端の世話をしなから何のくつたもなさそうに悠々として日章旗を振り、我等を迎へてゐる。キャンタベリーの比ばたならば何と

た。昨日までは打つて變つて御客扱ひにされた。ベルなどを押してボーイさんと呼んだりする勇氣が出なかつた。收容中頭の中を駆けずり廻つてゐた御馳走が本當に次から次と食堂に現れ出した。こんな御馳走攻めは御斷りしたかつたし、かしそれが私達を迎へてくれるためなのだからと事務長に聞かされたとき私達はほんとに感激した國は有難い。只もつ體ない。

波止場には交換される英人の下ランクヤストークスが山と積まれてあつた。聞いて見ると一人當り四十個だつたそうである。赤服の私達は破れたシャツや汚れたズボンなどを詰め込んだタオルで作つたりユツクサツクを一個背負つてゐるつぎだ。しかし私は彼等の財寶の山などちつとも羨ましいとは思はなかつた。最後の瞬間まで鎌倉丸にしがみついてゐた彼等の氣持ちからでも解るであらう。

戦火の英本國へ平和な距離細かから歸つて行かねばならぬ彼等、落日を追ふやうにして西行く人々の姿が色あせて散つて行く花のやうにかにもかたみに見えた。私達は鎌倉丸で日出づる國へと東行した彼等のはあのボロ船で西へ向つたらう。神がそれ／＼の民族に與へたところへそれ／＼が歸屬したといふことに過ぎない。持たなかつた私達が持てる者になる日が來つた、あるのだと思つた。

今度の收容生活中幾多の事例から私は日本人は白人種より遙かに立派であるといふことを何度も感得した。收容所の待遇について言つても彼等の態度といふものは『さし過ぎる。日本における待遇が優秀であるとのニュースが傳へられる度毎に私は、實際「態見ろ」と思つた。餘白もないので感ずるまゝのところをこの邊で擱筆します。

舉社職責遂行を要望

南方旅行出發に際し本社 職制改革の意義を闡明

社長 古野伊之助

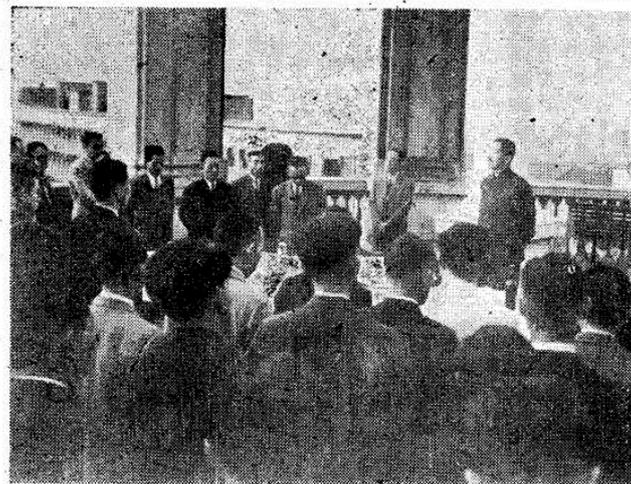
今朝突然諸君にお集りを願つたのけ私が明日南方に出發するに先立つて最近の感想を語れといふ編輯局の註文があつたからであります。南方に行くからといつて特別にお話することもないのですが、今月は留守するので諸君にお目にかかる機会がなく、それで出發の前に話をせよといふ要求だつたのであります。

この大東亞戰爭勃發以來、私は適當な時期に、なるべく早く南方各地に戰つてをられる皇軍將兵の奮闘をみて、親しく感謝の氣持ちを捧げたいし、また南方各地で、われらの同盟の同志が、それぞれ

困難な情勢下に活動してゐる模様もみて、慰め勵まして来たいと考へてゐたわけでありましたが、いろいろの用事に忙殺されてその機会を得なかつた。今同一應差迫つた用事が一段落をつけたので、この機会に三、四週間の豫定で一才南方に行つて来たのと考へ、明朝出發することにしたのである。

新編輯室獲得

今年の初めから始終私が胸を痛めてゐた問題が二つある。その一つは社屋の問題であります。地下室に頭張つてゐる編輯局を何とか綜合編輯の可能な場所を獲得して



次上海に立寄つた古野社長は、十月九日夕總局屋上において總局職員八十餘名に對し一場の訓話をした。總局員は二年半振りに元氣な社長の聲に接して、歡び限りなく、野戰料理を共にした。(寫眞は當日撮影)

中支總局における社長の訓話

南方旅行の途次上海に立寄つた古野社長は、十月九日夕總局屋上において總局職員八十餘名に對し一場の訓話をした。總局員は二年半振りに元氣な社長の聲に接して、歡び限りなく、野戰料理を共にした。(寫眞は當日撮影)

移すやりに氣をもみながらも、たうとう九ヶ月の月日を費した。その間、私は編輯局を歩くとき何時も何となくこの場所から早く編輯局らしいところへ諸君を移したい。このまま頭張つて貰つて若し健康でも損はせたらといふことを始終思ひ悩んでゐたのであります。最近漸くその望みを達し、どうにか愉快に働けるやうな形が出来上つたのである。

職制改革の意義

まだ寫眞部、發送部などの状態はものとまゝであります。これも漸次改善して行きたいと間斷なく心を砕いてゐます。

そこで恰度ここに集つた機會に最近發表した職制の改革と人事の異動についての考へを二應説明しておくことが妥當ではなからうかと思ふのであります。

三、四日前に職員會の幹事と稱して三、四名の諸君が来られ、新しい職場が出来上つたことに對して社長の御努力を感謝するといふことであつたが、私は諸君から感謝される筋合のものではない。却つて私が諸君に心からお禮を申したい。

大體職制改革といふやうな言葉を使ふと非常に大袈裟に響きますが、わが同盟はさうした、別に變つた大きなもの考へ方ではなく間斷なく仕事の仕組みと人の配置が妥當であるか、どうか、果して適材適所を得てゐるか、どうかといふことを始終檢討して、或は年に一回か二回くらゐに仕事の仕組みをかへて、その都度適材適所に人の配置をかへるといふことに過ぎないのであります。

もう一つの問題は戰爭勃發と同時に敵國に抑留された、われらの同志の在外特派員諸君の身の上であります。これもさきに米國に抑留された諸君が歸られ、最近また英國に抑留された同志もわれわれのもとに歸つてまゐりました。

今度の變更の重點は大體總務局と經濟局との二局にわたる問題でその他調査局は企畫局といふ名前に改めたが、内容は餘り變つてゐない。編輯局も、通信局もいくらかの類種の異動の程度で、變更の重點は總務局と經濟局にあつたのであります。

戰爭勃發當初それぞれの安危を懸念して、何とか無事にゐてくれればよいが、幸福にみんな歸つて来てくれればよいがと苦慮した問題もここに一掃されて、それぞれ元氣にますます前途に希望を抱いて、われらのもとに戻つて来てくれたことは、この上もない私の喜びとするところであり、またこれは同志三千の喜びでなければならぬと思ひます。

その他新しく審査部を設けたり特信部を企畫局に入れたり、多少の變更はありますが、企畫局が従來の國策遂行の基礎資料を提供するといふための仕事はその重點であることは元の通りであります。また同盟の經營する附帯事業に關する事務を企畫局の管下に包攝しました。これはかかる事業を一纏めにして、企畫局が專らその責任をもつて事業の育成強化をはかつて行くといふ考へにもとづくものであります。

敵國より同志歸る

その責任者の更迭をやつたのであります。従來總務局の中堅となつてゐた石部君を經濟局の責任者に振替へ、長い間經濟局の責任者となつてゐた塚本君を總務局の責任者に更迭しました。

經濟通信の一貫作業

同盟が過去四半世紀にわたつて經濟通信を日本のために、日本の經濟産業界のために經營して來たのは即ちこの帝國の經濟的地位を世界の情勢に結びつけて世界の經濟界の動きを國內へ、國內の實情を世界へと一貫した確立するたにほかならなかつたのであります。

企畫局の事業

その他編輯局に關しては従來内信部といふ一部に入つてゐた政治社會などの部が、人数があまり多過ぎて部長の統制が思ふやうに行かないといふ懸念から元に戻つて政經部と社會部に分けました。これくらゐが主なるもので、その他に取立て、申上げるやうな變更はありません。

經濟通信の一貫作業

同盟が過去四半世紀にわたつて經濟通信を日本のために、日本の經濟産業界のために經營して來たのは即ちこの帝國の經濟的地位を世界の情勢に結びつけて世界の經濟界の動きを國內へ、國內の實情を世界へと一貫した確立するたにほかならなかつたのであります。

企畫局の事業

その他新しく審査部を設けたり特信部を企畫局に入れたり、多少の變更はありますが、企畫局が従來の國策遂行の基礎資料を提供するといふための仕事はその重點であることは元の通りであります。また同盟の經營する附帯事業に關する事務を企畫局の管下に包攝しました。これはかかる事業を一纏めにして、企畫局が專らその責任をもつて事業の育成強化をはかつて行くといふ考へにもとづくものであります。

經濟通信の一貫作業

同盟が過去四半世紀にわたつて經濟通信を日本のために、日本の經濟産業界のために經營して來たのは即ちこの帝國の經濟的地位を世界の情勢に結びつけて世界の經濟界の動きを國內へ、國內の實情を世界へと一貫した確立するたにほかならなかつたのであります。

企畫局の事業

その他新しく審査部を設けたり特信部を企畫局に入れたり、多少の變更はありますが、企畫局が従來の國策遂行の基礎資料を提供するといふための仕事はその重點であることは元の通りであります。また同盟の經營する附帯事業に關する事務を企畫局の管下に包攝しました。これはかかる事業を一纏めにして、企畫局が專らその責任をもつて事業の育成強化をはかつて行くといふ考へにもとづくものであります。

經濟通信の一貫作業

同盟が過去四半世紀にわたつて經濟通信を日本のために、日本の經濟産業界のために經營して來たのは即ちこの帝國の經濟的地位を世界の情勢に結びつけて世界の經濟界の動きを國內へ、國內の實情を世界へと一貫した確立するたにほかならなかつたのであります。

企畫局の事業

その他新しく審査部を設けたり特信部を企畫局に入れたり、多少の變更はありますが、企畫局が従來の國策遂行の基礎資料を提供するといふための仕事はその重點であることは元の通りであります。また同盟の經營する附帯事業に關する事務を企畫局の管下に包攝しました。これはかかる事業を一纏めにして、企畫局が專らその責任をもつて事業の育成強化をはかつて行くといふ考へにもとづくものであります。

經濟通信の一貫作業

同盟が過去四半世紀にわたつて經濟通信を日本のために、日本の經濟産業界のために經營して來たのは即ちこの帝國の經濟的地位を世界の情勢に結びつけて世界の經濟界の動きを國內へ、國內の實情を世界へと一貫した確立するたにほかならなかつたのであります。

企畫局の事業

その他新しく審査部を設けたり特信部を企畫局に入れたり、多少の變更はありますが、企畫局が従來の國策遂行の基礎資料を提供するといふための仕事はその重點であることは元の通りであります。また同盟の經營する附帯事業に關する事務を企畫局の管下に包攝しました。これはかかる事業を一纏めにして、企畫局が專らその責任をもつて事業の育成強化をはかつて行くといふ考へにもとづくものであります。

經濟通信の一貫作業

同盟が過去四半世紀にわたつて經濟通信を日本のために、日本の經濟産業界のために經營して來たのは即ちこの帝國の經濟的地位を世界の情勢に結びつけて世界の經濟界の動きを國內へ、國內の實情を世界へと一貫した確立するたにほかならなかつたのであります。

に、同盟の經濟局が今までのやうな考へ方ではいけないといふので従來總務局に所屬した業務面の仕事、通信局の發送部で行つてゐた讀者への通信發送の仕事にいたるまで全部經濟局において一貫作業をもつて運営するといふ根本方針をきめたわけでありました。

その責任者の更迭をやつたのであります。従來總務局の中堅となつてゐた石部君を經濟局の責任者に振替へ、長い間經濟局の責任者となつてゐた塚本君を總務局の責任者に更迭しました。

その他編輯局に關しては従來内信部といふ一部に入つてゐた政治社會などの部が、人数があまり多過ぎて部長の統制が思ふやうに行かないといふ懸念から元に戻つて政經部と社會部に分けました。これくらゐが主なるもので、その他に取立て、申上げるやうな變更はありません。

その他新しく審査部を設けたり特信部を企畫局に入れたり、多少の變更はありますが、企畫局が従來の國策遂行の基礎資料を提供するといふための仕事はその重點であることは元の通りであります。また同盟の經營する附帯事業に關する事務を企畫局の管下に包攝しました。これはかかる事業を一纏めにして、企畫局が專らその責任をもつて事業の育成強化をはかつて行くといふ考へにもとづくものであります。

以上が今度の職制改革の主な點であります。どこまでも、その根本の精神は社の中心になつて責任を擔當する諸君がそれぞれの分野においてどこまでも舉社一體の精神に燃えて、よりよき理解を各局局員に持ち、全體がよく協力して同盟の育成強化に協力し得るやうな經驗と、それから意識を昂揚するといふ點にあります。

留意すべき點は如何なる異動があつても、如何に職制が變つても結局目的は大同盟建設のため人の適材適所の配置を意圖するといふことにあります。

次に私は南方に出掛けるに當り先づ考へることは同盟としてやらねばならぬ喫緊の事業は南方全地域にわたる完全なる通信網の整備といふことであり、國がこの大戦、この大武力戦を展開するその努力と併行して、南方の全地域に出来る限り完全な通信網を整備して、南方の諸情勢を國內に一刻も早く通報することはもちろんのこと、南方相互の基盤においてよくニュースの交流をなし得るやうにしなればならない。またさらに進んでは南方から直接世界各國に南方の建設事情、或は武力戦の推移などを通報し得る施設をなすこともまた同盟に課せられた使命であります。

出發に先立つて一寸思ひ浮んだ感想を述べて、それぞれの新しい部署につかれた諸君に對しそれぞれ新しい決意を持つて、職責遂行に御努力願ひたいと思ひます。

私の南方旅行の日程は今のところ三週間の豫定ですから、直ぐ歸りますが、諸君も元氣で御奮闘願ひます。(十月二日午前九時本社綜合編輯室において)

鍊成

中支總局の秋季旅行

無錫と太湖水郷巡り

新聞休日を利用して中支總局では九月二十四日太湖水郷巡りを催した。この日總局員およびその家族の殆んど全部が参加して總局八十餘名、午前八時上海驛前に集合、同八時三十分南京行の急行列車に華中鐵道の好意で一輛を獨占して出發、豊かに實る海南線の秋を賞でつつ同十一時無錫驛着、直ちに用意の客船二隻に分乘し、眞紅の同盟旗を先頭に太湖の水郷目指して進發、途中同乗した特務機關員から今平和に甦る同地方清郷工作の苦心を聴きつつ鏡のごとき流れを廻航して太湖に向ふ。

空は飽くまで高く、水はあくまで清く、廣漠と擴がる豊穰の平野

の彼方は秋霞の奥に隠れて平和に眠つてゐるかのやうである。時折行き交ふ漁船の漕ぐ鱗もなつかしく、邊りの單調を破らんとするかに思はれる。

我々の船のエンヂンの音も遂に大地の無言の威力に壓されて靜寂の彼方に消えて行く。船が屈折した一點を過つたと思ふと突如視野が開けて渺々たる太湖が前面に展開した。

湖は太湖の名にふさはしく實に廣く深い。その水面は我が福岡縣の全面積に匹敵してゐる。湖畔に點綴する支那家屋も一段と趣きを添へる。「我關せず焉」と獨り鶴飼ひに樂しむ漁夫の姿も珍らしげに眺められ、紺青の空と清淨の水に映える江南の秋を心行くばかり満喫して午前八時半上海驛に歸着解散したが仲々の盛會であつた。(寫眞は湖畔における記念撮影)

京阪神三支社局合同鍛鍊大會

大阪支社および京都、神戸兩支社合同の第一回鍛鍊大會は九月二十四日京阪電車沿線千里山運動場で開催した。折柄絶好の快晴に恵まれ、参加社員および家族は五百名を超える大盛會である。社員家族一體となつて或はトラックに或はフィールドに各種競技を競ひ遺憾なく鍛鍊の實をあげた。

五人一組の戰爭競争といふのもあればジャングル競争も飛出して戦時色を横溢いづれも眞摯敢闘、熱汗をふるつての奮闘にスタンドからは拍手の聲援が續く。そのスタンドの方に眼をやれば京都支社の應援團はさすが着倒れの土地柄をしめし、揃ひの防護團服に鞍馬天狗のお面姿も微笑しくなかなかに異彩を放つ。



まづ午前九時國民儀禮、福岡大阪支社長の挨拶について高橋神戸支局長の號令で元氣いっばいのラジオ体操を行ふ。次いで百メートル少年組競走をトップに駒岡豪華?な競技の幕を切つて落した。

雷名をさせてゐるが、長老五十メートル競走に出ても力

走、ゴール寸前で倒れながらに滑り込んで二等獲得、應援團席の天狗連、長い鼻をゆさぶつて喝采した。競技で何といつても血をわかしたものは各部支社局對抗競技の中でも綱引決勝では昨年來の宿縁の敵手大阪編輯部と京都支局がまたまた顔を合はせ、大阪側が會稽砲彈技)

の恥を雪いだ。かくて午後四時半全種目の競技を全く終了、川島前神戸支局長の挨拶、諸富京支局長の發聲で同盟通信社萬歳を三唱してめでたく散會した。

(寫眞は二十メートル・レースと砲彈技)

幼年組のカケトラベや飴を唾へて走る飴食ひ競走は家族席の人氣を呼び、力くらべでは麻生支社長が發聲する元氣をみせて若手連を押へて優勝、掉尾を飾る男子四百メートル競走は熱戦の未發途部に凱歌があがつた。

かくて麻生支社長の閉會の辭があり、秋空高く同盟萬歳を三唱して和氣黨々裡に午後四時半閉會した。(寫眞は玉送り競技)

加賀一ノ宮驛で下車、國幣中社白山比咩神社に向ふ。老杉亭々と聳え神威の雲霧遙遠する社頭に一同大東亞戰爭完遂の祈を捧げたのち、木炭カリーを利用し冷涼の鬱氣の中を登清水に至る。

紅葉に早い田舎道をゆくこと二丁餘にして黃門橋上に立つ。脚下數丈、屹立する溪谷の岩肌に激する奔流は間近に迫る山容を映して自然の繪をなす。探勝しはし吉野谷發電所横の廣場に兵站基地を置き、天然記念物「おほけ杉」を訪ふもの、茸を狩るもの、發電所を見學するもの、ブランコに興ずるもの等々、やがて賑かな晝食後の運動會の珍プレーに抱腹の一ときを過し午後二時歸途についた。

車中吟一句
編隊で車窓すぎゆく赤トンボ
(咲)



隊、飴食ひ競走、密林突破、川中島、力くらべと時局色やら滑稽味やらを盛りあげた二十五種目の鍊成競技の白熱戦が次から次へと展

金澤支局の釜清水探勝行
白山比咩神社に参拜、戰勝祈願

櫻金澤支局長急逝
金澤支局長櫻鐵三郎氏は腦溢血のため十月十一日午前二時三十分金澤市高岡町の自宅で急逝した。享年五十一。告別式は十三日自宅で執行された。氏は金澤市の出身若くして操縦界に入り大正八年以來電通、引續き同盟の金澤支局長として活躍、最近は實業會石川縣支部企畫委員を兼任してゐた。

新新聞調査会
JAPAN PRESS RESEARCH INSTITUTE

青年團彙報

石老山登攀

本社青年團の練成大會はA、Bの二班に分れて去る十二月十七、十八日の休日を利用して全山紅葉に包まれた神奈川縣與瀬、石老山を訪れた。豊島幹事に引率された團員八十五名は秋晴の澄切つた天気に恵まれ意氣軒昂、午前七時半新宿驛前に集合し午前八時三十分發長野行に乘車する。九時四十分與瀬驛着、全員驛前廣場に集結、豊島幹事より注意事項を指示された後一同元氣一杯社旗を先頭に石老山へ向つた。驛前よりの垣々たる自動車路を行くこと二十分、前日の雨で濁流滔々として流れる桂川（相模川上流）に出る。吊橋を渡ると道はそろ／＼山道らしく、緩やかな坂道になる。約一時間にして石老山登り口の關口部落に入る。此處より自動車路に別れて小路に入ると間もなく小川に出た。此處で小休止十五分、一同が配給されたパンに双頬をふくらまし、やがて清い流れを左に細い道をしばらく行くと前方に大きな森が見える。清流に別れて森の中に入る。何百年もたつた杉の老木の間を泉がちよ／＼と流れてゐる。苔むした石段を登るとやがて顯鏡寺に着いた。大きな岩の下にある寺を拜した後一同晝食をとる。

身仕度を整へると再び出發、道も急になつた。十五分で見晴臺に着く。健脚揃ひの一行はぐん／＼登つて行く。此の邊りより道は尾

根を走つてゐる。細い一列になり社旗を先頭に登る。紫色のアカビがそちこちの木になつてゐる。第一の尾根の頂上に着いて小休止。一同は汗をふいてまた出發だ。五時の列車に乗る豫定でピッチをあける。暑い。一同汗でびしょりだ。二つ三つ尾根を越す。前日の雨で山道はすべる。四つ目が頂上である。

秋晴の空は益々高く、遠くに陣場の連山が薄青く續いて、やがて大空に溶けてゐる。眼下には箱庭の様に小山あり、小川あり、田舎家あり、黄金色の稲田がきちんと四角に並んでゐる。一同記念寫眞を撮ると汗の干く間もなく前の道を引返した。顯鏡寺まで一氣に下る。寺務所のお茶とパンが配給された。一同元氣を回復、足の痛みも何のそのと約一時間一人の落伍者もなく夕陽迫る與瀬驛に着いたのは豫定より早く四時半だつた。心配した列車も全員乗車出来、六時三十分新宿着で歸京した。戦時下山気分ではなく心身の鍛練と相互の親睦を目的とした練成大會の意義は充分達せられた。總てが密集的に團體行動が行はれ、一人の落伍者もなかつたことは團員の忍耐を語るものであり、またわれら青年團の本領を發揮したものである。（大村徳太郎）

山と闘ふ者

本社練成大會に参加して

『おーい汽車が出るぞ』と、誰かが言った。私の心はうき／＼と何んともいへぬ嬉しき／＼に満たされて来た。乗ること一時間餘、『與瀬驛々々』と呼ぶ驛員の聲に迎へられて下車、驛前で全員整列、社旗を先頭に勇躍目的

地へと向つた。空に漂ふ雲が、秋の陽を受けて遙か山麓まで打續く鳥のうねに、昨日の雨で一きは澄みきつた山の峰々に薄い影を映しながらかつて行く。そちこちに栗のいがが澤山落ちてゐる。赤く熟れた柿が鈴なりになつてゐるのを仰ぎ見ながら私等は腕を組み歌を唱ひつゝ山に登り始めた。

大阪支社青年團 合宿練成會感想

約五合目あたりに来ると老樹に覆はれた石老山社が神々しく立つてゐて、その傍に何千年の昔からあつたやうな一面に苔の生えた古い大きな石が澤山あつた。『約一時間休憩！』と、幹事が號令をかけた。空気の冷や／＼する其處で汗ばんだ身體を休めながら、神社の下で楽しい晝食の包を解いた。『出發』幹事の合圖で一同ふたたび出發だ。あちこちに女郎花や、すずきの花がうら／＼と咲いてゐる山路を頂上目指して前進した。丁度北支の山嶽地帯で殘敵を掃蕩してゐる皇軍勇士のやらかな感じである。

『後百メートルで頂上だぞ』と私は叫んだ。我々は一番乗りの功名争ひに急に速歩にした。社旗は我々よりも先に出たので我々はそれを追ひ抜かんとあせつた。或る者は元氣を出す爲に歌を歌つてゐる。『ああ後僅か十メートル、我々はわあ／＼』と喚聲があつた。そして断足で登つた。『一番乗り』と叫んだ者がある。私は三番になつた。社旗は二番であつた。私の後から續々と来た。私は頂上の一隅で横臥して早い息をついた。社旗は石老山の頂上に翩翩として飄つた。遙るか彼方には陣馬山、影信山が薄い雲を戴いて聳え立つてゐる。眼下には相模川がきら／＼と反射してゐる。我々は此の石老山と闘つて勝つたのだ。……いや、まだ勝つたとはいへぬ。勝利は最後にあるのだ。

此の敢闘の精神は一生涯持ち續けなければならぬ。時計を見るのと時半であつた。太陽は我々の身を融けよとばかりさしてゐる。やがて我々は陽を背に受けながら歸途へと急いだ。（編輯庶務 宮原清一）

はれるのである。練成をするといふ根本は團體生活の訓練と身心鍛練とであるが、しかし眞の意義は單なる身心鍛練に満足するものでもなければ、團體生活の訓練のみに止まるものでもない。如何なる道徳に立とうと、如何なる試練に遭はうと断じて敗るることなき信念の所有者たらんがため、それと同時に戦時下を背負ふ我々若人たるもの、本分をわきまへ、又刻みつけて一生忘れることのない練成でなければならぬ。とかう書けば一週間のことのやうなことが出来るものかと思ふが、一體練成といふものは人がこの世に生れた時から始まり、息を引き取るまでではなからうか。ただあの一週間の練成とは、一體どんなものであるか、又どんなことをすることが練成であるかといふ手ほどきのやうなものだと僕は深く信ずる所である。

顧みれば始めて寮につくなり草取りをさせられた。いや／＼草取りの業にかかつた。道具が皆持つだけに足らなかつたので僕は他の人が草を鋤などで取つたのを、一所へ運んだり、又小さい草などを手でぬいたりした。僕はいやなのを忘れて、一生懸命にやつた。皆も一生懸命にやつた。すると約半時間後には可なり広いあの寮の廣場の半分程美しくなつた。その時は協力一致すればえらいものだなと、つく／＼感じさせられた。

入浴をすました時はお腹がペコペコであつた。第一日目の夕食は非常においしくいただけだ。御飯の有難さがわかると同時に百姓の御苦勞を忍ばずには居られなかつた。なんとなく愉快であつた。床につくと皆がさわいだ。僕もしばらく隣のものと話をした。三日目頃になると皆と友達となつた。幼い時から兄弟に不運な僕としては何よりの喜びであつた。朝、すが／＼しい朝早く床を出てて断足だ。元來僕は機械體操に得意ではあるが、走ることにかけては苦手であつた。落伍するだらうと豫期してゐたが、無我無中であつた。終に落伍しなかつた。「なせばなる、なせばなる、ぬへ事も」といふ文句をつくづく考へさせられた。

五日目には僕等の作つた土俵で相撲をとつた。僕は一番年下らしく、又體も皆にくらべて強そうであつた。當然負けると思つてゐたが、相撲は勝負を決するものではない。身心鍛練をする運動だと思つた。諺にある通り「大敵たりとも恐れず、小敵たりとも侮らず」といふことを思ひだして相撲を取つたら思つてゐたより成績がよかつた。

最後の日には水泳があつた。鬼ごつたり、騎馬戦をしたりなどして童心さながらの姿で楽しんでゐた。とても家にゐては味はへることの出来ない楽しみであつた。又レコードをかけて一緒に歌を歌つたこと、何一つ楽しくなかつたことはなかつた。また、僕の何よりもうれしかつたことは澤山の友達が出来たことである。

今床の中で思ふに何故、練成に行くのをいやがつたのであらうかと不思議に思ふくらゐである。あゝ楽しかつた。もう一度あの楽しみを味わいたい、いや、これから機会あるごとに、時々やつてほしいと思ひながら十時の時計の音をかすかに聞きながら眠りに入つた。

（商況部 文野眞）

△附記 大阪支社青年團合宿練成會の感想は右のほかに野口、橋口、山崎、池口、池田、尾坂等の諸君の書かれたものも送つて貰つたが紙面の都合上他は割愛し文野君の一篇だけ採録した。（編輯生記）

洪水の中の盤谷支局

珍談百出、「舟水牛に衝突せり」

大洪水中のバンコック支局の近況を報告します。二十数年振りの大洪水が北部タイで荒れ狂ひ、漫々のではあるが南下し始めてゐるといふ情報があるがバンコック支局に飛び込んだのが九月末だった。それから支局員一同タイの大洪水とはどんなものかと調べ上げたり、洪水対策を考へてこの難關を何とか無事に過ごしたいと努力し始めたのだが、何分連日のガン／＼照りその真下で眞面目に洪水の対策はと考へて見た所でどうも乗り気がしない。ああやればよいとか、か

やれ／＼準備が完了したと思つたとき、そのとき遂にバンコックも浸水をはじめ、十月三日朝には支局前庭も十センチ程の浸水を見

いよく来たぞと思つてゐるうちに水は日に日に十センチ程づつ増水し、十日後の十二、三日には支局の前庭は満々たる水があふれ

でつかるといふ物凄いい洪水風景を呈し、全市いづれにでも舟で結構といふベニスさながらの風景を演出してしまつた。

もちろんかうなると支局を一步出るにも船の御厄介にならなければならぬのだが、タイ國の舟と來たら日本の舟のざつと四、五倍は不安定確實といふ保證付きのものなので、日本の素人衆がこ

の舟に乗ると走るよりひつくり返る方の歩が遙かに多い。一日平均二人や三人の入水者を出さん日はない。



本社にゐる時から餘り大きいとはいへない水野支局長などはこの舟を極端に嫌つて洪水以來トント出不精になり、連日人が水に落ちるのを見てはカラン／＼と例の笑ひ聲を發してゐる。笑はれる面々は支局外の社宅に生活する依岡、高倉記者、梅本、高田眞眞、前田



ただ不幸中の幸ひは支局の構造が床高のため床上に浸水することなく朝日、日日、讀賣の支局の如く二階すまひにまで行かずにゐることである。然し今は増水も極限に達し漸次下り坂となつたから支局員一同も元氣旺盛社務に精勵してゐる。

感化され、いづれも半ズボンに開襟の颯爽たる姿で水に落ちつつ、濁水を呑みつつ、漕法を習練、今では一流のボートマンになりすまして河上ならぬ道路上を自由に往來してゐる。

たゞ夜のみは如何なる豪快派も水にあふりを喰つた毒蛇が垣根あたりで狙ふかも知れぬといふ恐怖心から(バンコックでは現在一日平均十人以上の毒蛇被害者が出てゐるからその恐怖心は杞憂にあらず)専ら家に閉ぢこもつて園藝に親しみ、園藝大東亞大會を開催、互に黑白を戦はしてゐる。

汗に全身を濡らしつつ今日は電信柱と衝突した。今日は流されて隣の家に飛び込んだといふ報告、十五日には「舟我れの意の如くならず遂に水牛の股に突つ込めり」は如何に舟の操作が困難なるかを立派過ぎる程證明して一同を啞然たらしめる。



しかし減水までゆつくり一ヶ月はかかるといふ大洪水に消極戦法で舟に乗らぬ。家に閉ぢこもつて窓から魚を釣る珍藝に日を送るのみではどうもいふ豪快派が續出し、逐次支局員一同その豪快派に

【十月分】

結 婚

馬場繁次郎 前田 雄二
吉村チヨノ 黒田サキ子
小野 隆雄 村井 茂
大原 寛明 得能 益忠
杉本 律子

出 生

安東 泰善(京 城)次男
李 誠 敬(臺 北)長女
須藤宣之助(編 輯)次女
松浦 清直(福 山)同
義村 正三(松 山)同

桑川 禮子 大 阪 病氣
畑 井 勇 通 信 同
金 栢 灼 京 城 同
奥地寛治郎 室 蘭 同
石田 誠一 神 戸 同
佐藤佐知子 神 戸 同
高羽 敏是 同 同
東 清司 富 山 同
荒井 秀信 同 同
鬼頭 清 名 古 屋 同
富田市の進 編 輯 同
岩城美智雄 編 輯 同
村山 清弘 佐 賀 同
曾我 晴行 通 信 同
高木 凱人 臺 北 同
安部 千織 神 戸 同
國澤 秀穂 高 知 同
大映 義雄 同 同
内海朝次郎 大 企 同
井上 正讓 同 同
東野 正雄 同 同
木村 福一 同 同
久保木菊伊 同 同
小澤 俊則 同 同
桑田 順平 同 同

原科幸太郎 靜 岡 同
月村 南壽 同 同
川添 邦彦 同 同
長島 秀隆 同 同
戸來 錦富 同 同
四條 重幸 同 同
堀田 義雄 同 同
鹽崎 由夫 同 同
伊達 弘夫 同 同
多田 武夫 同 同
堀川 武夫 同 同
村川 武夫 同 同
山田清一郎 同 同
金島 顯一 同 同
海福 早苗 同 同
湯本與喜二 同 同

編輯 古野社長が南方旅行から歸られる前に支社まで送られたが、袋は自宅にもない。新調して送りました。奥様は笑つて「嫌ひですからどんなのを送つても使ひますまい」といはれたさうである。社長の生活態度の厳格さを示す一例だ。(昌)

計 件数 七、一〇七件
金額 一、一六〇圓